



令和4年度 4月 人権一口講座



「大切な人」

「俺は強かったんだけん番長だったけん。格好良かろ」

「あ、そうね。その話ならもう百回以上は聞いてるけんねー
あの子は手がかかったもん。何度も家に連れ帰って言い聞かせたたい。」

「もう、その人なら五十歳を越さしたばいー」

「正直言つて、もちよつと家についてよかと思つた。嫁に出そごつなかつたー!!」

「親父の亡くなった年齢が五一歳。せめてその年までは生きていたたい。」

「もう三十年も越しとるよ。長生きし過ぎじゃないのー」

「教え子だったあいつが先に亡くなった。もう弔辞を読んでくれる親友も誰も生きとらん。誰にしてもらえばよかかなー。」
「お父さんて!今はコロナだけん葬式も家族だけで済ませることが多かてよ。弔辞を心配してもお父さんは至って元気でしょうが!」

(父と私の会話から)

このところ実家の父親の話相手をしていて気付いた。前にも増して昔話が多くなった。それも話はすべて現在と過去が入り混じっている。まだらにボケが入っているようである。

私が幼い頃は怖くてたまらない存在だった父が幼子のように見え、ふつと以前の楽しかった出来事が思い起こされた。それは、家での入浴シーンである。

小さかった頃は父親と入浴することが多くあった。父親が『ザブーン』と浸かると湯はあふれ、言葉が出たものだ。

「あー、こくらく、こくらく」今でも耳の奥深く父の声色で聞こえるようだ。
しかし、今では入浴するにも、父は椅子に腰かけて素早く身ぎれいにする位で、長湯はしない。というか、湯に浸かるとそれはそれは時間がかかって困ることになる。

しかしながら、疎んじてはいけけない、そう解っている。けれど、私達も時間が足りない位に忙しく暮らしている。

「お父さんて、今度孫息子が帰ってきたら、一緒にお風呂に入ったらどうね?したら、何て言うだろうね?」と聞いてみた。すると、父親は「こくらく、こくらく」と即座に返した。

「大切な人」として軽んじることなく心を込めて接するね。父さんが望む極楽に行くその日を迎えるまで。

(ふれあい文化センター広報誌「かけはし」4月号より)



短いメッセージ 花に水をやった 友達のもあげた
みんないっしょに育つといいな

熊本市・熊本市教育委員会・熊本市人権啓発市民協議会のカレンダー 力合小学校3年 丸お ももかさん(令和3年度の作品より)